

## 伝送便カレッジ 第1回

小幡道昭

2013年1月28日

1 / 10

# 労働

## 『資本論』における「労働」

これから、「労働」という視点から、『資本論』を読んでゆく。  
今回は、「こういう話はしません」という「期待」をわざと裏切る話をします。  
で、搾取 という話になりますが...

3 / 10

## 搾取論としての労働

- ① イギリスにおける労働者階級は実際のすがたはなかなかでてこない。
- ② はじめは商品の価値の大きさをきめるのは労働の量だ、という労働価値説の話。
- ③ 出発点は労働ではなく、あくまでも商品です。
- ④ このあと、商品、貨幣、そして資本と話が進み、
- ⑤ ただの売買だけでは、資本はもうけることができない、
- ⑥ 新しく価値を生みだすことができるのは、労働だけだ、という。

4 / 10

## 搾取論としての労働

- ① 1日8時間労働する。だが、そのために必要な生活物資は4時間で生産できる。
- ② 労働力の価値と労働力のつくりだす価値とは違う、という議論。
- ③ 労働者には8000円支払う。しかし、その労働者は16000円の価値を追加する。
- ④ もちろん、原材料や機械の消費部分などある。これが16000円だとすれば、32000円の生産物の価値。
- ⑤ 付加価値は16000円で、それが8000円の賃金と剰余価値に分かれる。この剰余価値が利潤の源泉だ。

5 / 10

## 搾取論と啓蒙主義

- ① 通俗的なマルクス主義には、労働者は搾取されている、それが労働者の生活を惨めなものにしている、.....と「現状認識」に訴える。
- ② それは資本主義の仕組みを通じて、隠されている....とささやく。
- ③ 労働者を「啓蒙」して真実を明らかにする。
- ④ 啓蒙とは.....? 上から目線をさけて「学習」などということもあるが。
- ⑤ 真実を知った労働者が立ち上がり、資本主義が倒れる....
- ⑥ これは中学生レベル。もうすこし、工夫を凝らし体裁を整えることはできるが、基本的には同じ発想法のマルクス主義理解は支配的。
- ⑦ 搾取されていることは紛れのない事実。だが、そこからどう運動をつくるかは、簡単ではない。
- ⑧ 啓蒙主義は、党の独裁、エリート党官僚の支配と紙一重。

6 / 10

## 通俗的マルクス主義

- ① マルクス経済学は「資本主義における搾取の必然性を科学的に明らかにすることにある」といったイデオロギー（社会的通念）
- ② マルクス経済学を教えているという、たいてい人はこういう話を、学生に聞かせていると思うようだし、そういう話を期待しているひとも多い。
- ③ これから話す内容は、ちょっと見たところ、それからかなりズレている。
- ④ たいてい人の人の反応は、①期待はずれ②むずかしい③歪曲だといったもの。
- ⑤ 期待にそい、わかりやすく、話すのは簡単だ。
- ⑥ だが、それでは『資本論』を読む意味はない。そうした人々は、すでに知っていることを、ただ確認し、権威づけただけだ。

7 / 10

## 搾取についてのクールな見方

- ① 『資本論』の冒頭からでてくる労働は、搾取論のためのもの。
- ② 搾取論は別にマルクスの専売ではない。
- ③ たとえば「労働全取権論者」などさまざまな社会主義者に共通
- ④ 搾取を不正義だとただ糾弾しても、資本主義は乗りこえられない。
- ⑤ 当時の社会主義のなかではユニークな主張をする。
- ⑥ 普通の商品と同じルールで労働力が商品として売買されるなら
- ⑦ かならず剰余価値が発生する。
- ⑧ 等価交換のルールに反するから剰余価値が発生するのではなく、
- ⑨ ルールが貫徹するからだ。”市場のルールを守れ”という小生産者型運動からの脱却。

8 / 10

- ① 搾取がどんどん進むとどうなる状況になるか？
- ② 蓄積 → 資本構成の高度化（機械化） → 生産力上昇 → 雇用収縮
- ③ あるいは資本構成の高度化（機械化） → 生産力上昇 → 利潤率の低落
- ④ 資本主義は歴史的使命を終えるという歴史的必然性論。
- ⑤ この「歴史理論」の評価については『マルクス経済学方法論批判』で論じてみましたが、むずかしいかも。4回目に、できるだけわかるように説明してみます。

- ① 社会体制としての資本主義をトータルにつかまえる必要がある。
- ② 歴史的な社会としての特徴と限界
- ③ 資本主義の根本をなすものはなにか？ —
- ④ 歴史をふりかえってみても、市場は存在するが、資本主義といえる社会はなかなかでてこない。
- ⑤ 労働の生産物は商品になるが、労働力がなかなか商品にならない。
- ⑥ 『資本論』第1巻の最後にでてくる「資本の原始的蓄積」
- ⑦ この話は、いまおこっている、資本主義の新たな勃興、新興経済圏（エマージング・エコノミー）、グローバリズムという今日の資本主義を考える基礎になる。重要な問題なので、たぶん、次の次の次に...
- ⑧ 次回は「そもそも労働とは？」というテーマで本質論を
- ⑨ 次々回は「みんなではたらくとは？」というテーマで協業と分業の問題を
- ⑩ 次々回は「なぜ賃労働なの？」というテーマで資本主義のはじまりと終わりの問題を、考えてみる予定です。